



Data

監督：ニコール・ガルシア
 脚本：ジャック・フィエスキ、ニコール・ガルシア
 原作：ミレーネ・アグス『祖母の手帖』（新潮クレスト・ブックス刊）
 出演：マリオン・コティヤール／レイ・ガレル／アレックス・ブレンデミュール／ブリジット・ルアン／ピクトワール・デュボワ／アロイズ・ソヴァージュ／ダニエル・パラ

■ショートコメント■

◆公式ホームページによれば、本作の「Introduction」は次の通りだ。

「あなたは人妻だ」
 「私のために戻ったはずよ」
 ミレーネ・アプスのベストセラー小説「祖母の手帖」を、アカデミー賞受賞のマリオン・コティヤール主演で映画化！
 熱烈な愛の手紙を綴る情熱的なヒロインを演じるのは、『エディット・ピアフ〜愛の讃歌』で米アカデミー主演女優賞を受賞後、国際的に活躍するマリオン・コティヤール。自由奔放な欲望を、抑制を利かせた演技でリアルに銀幕に息づかせ、セザール賞主演女優賞候補となった。ガブリエルの「運命の男」には今やフランス映画界で絶大な人気を博すレイ・ガレル。繊細な感受性と儂い気品で「帰還兵」を演じ切り、その濃密なデカダンスは観る者をも魅了する。夫ジョゼ役には、バルセロナ出身の実力派、アレックス・ブレンデミュール。ガブリエルを大人の包容力で静かに見守り続けるという難役を、生命力あふれる野性味で美直に体现。監督は、『愛と哀しみのボレロ』など女優としても知られるニコール・ガルシア。「このヒロイン役にはマリオンしかいない」と直感し、彼女のスケジュールが空くまで5年間待ち続けたガルシアの拘りと執念はラスト、カンヌ映画祭で絶賛された衝撃的なラヴストーリーとなって見事に結実した。

◆公式ホームページによれば、本作の「Story」は次の通りだ。

南仏の小さな村に暮らす若く美しいガブリエル。最愛の男性との結婚を熱望しながらも、地元の教師との一方的な恋に破れ、不本意ながら両親の決めたスペイン人労働者ジョゼの妻となる。「あなたを絶対愛さない」「俺も愛していない」。そう誓いあったにもかかわらず、日々、近づいては離れる官能的な夫婦の営み。そんなとき、流産の原因が結石と診断され、アルプスの山麓の療養所に滞在することになる。そこで、インドシナ戦争で負傷した「帰還兵」アンドレ・ソヴァージュと運命的な出逢いを果たす。それは彼女が綴る清冽な愛の物語の始まりとなるのだった――。

◆『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）（『シネマルーム16』88頁参照）でミアカデミー主演女優賞を受賞したことによって、今や世界的な女優になったマリオン・コティヤールが、本作では導入部から「この女、ひょっとして精神病？しかも、色気違い？」と思わせるような演技を見せるので、それに注目！

あまり自分に目を向けてくれない男前の地元の教師に対して人目もはばからず迫っていく姿は、ガブリエル（マリオン・コティヤール）が村の中ではかなりの美人だけに目立ってしまう。しかも、この教師が自分を相手にしてくれないとわかると、その反動の大きさをたるとや・・・？

◆全くガブリエルの意に沿わない、親が決めたガブリエルの結婚相手は、労働者で金もなく、魅力もない男ジョゼ（アレックス・ブレンデミュール）。そう思っていたが、これが意外と良い性格で、かつ働き者の男だったらしい。ガブリエルからかなり冷たい仕打ちを受けるものの働き者のジョゼは経済的にリッチになっていくうえ、夫婦仲もまずまず。そして、赤ちゃんもちゃんと誕生するから、めでたし、めでたしだ。

もともと、本作中盤からは、腎臓結石のためアルプス山麓の療養所に滞在することになったガブリエルが、若き帰還兵・アンドレ・ソヴァージュ（ルイ・ガレル）と運命的な出会い（というより、ガブリエルが一方的にちょっかいを出した出会い）で、かなりヤバイ行動に出るから、ひょっとして、この妊娠のお相手はジョゼではなくアンドレ・・・？本作を観ながら私はそう確信したが・・・？

◆ガブリエルの腎臓は結石さえ取れば大丈夫のようだが、アンドレの腎臓病はかなり末期で、いつ死んでもおかしくないような状況だった。そのため、ある日彼の病室が片付けられてしまうと、てっきりガブリエルは・・・？ところが、人工透析をしたことによって再度アンドレが戻ってきたから、ガブリエルは大喜び。今度は立派な個室に入ったアンドレのところにガブリエルは入り浸り状態となり、ベッドを共にしたこともあったようだから、こうなると次の問題は、いわゆる不倫、三角関係・・・？

そう思っていたが、いかにもフランス映画らしく本作後半からクライマックスにかけては、全然そんな「ゲスの予想」とは全く違う、ネタバレ厳禁の展開になっていくので、それはあなた自身の目でしっかりと・・・。

◆本作の原作のタイトルは『祖母からの手帖』だから、多分これはガブリエルの孫の視点からガブリエルの波乱万丈の愛の物語を語ったもの。それに対して本作の邦題は『愛を綴る女』だから、ヒロインのガブリエルが自ら自分の愛の物語を語る形のタイトルになっている。たしかに、本作導入部では彼女が綴る「愛の言葉」のストレートさ（どぎつさ）にビックリさせられるからそれにも注目したいが、本作ラストに向けてはガブリエル自身による「真相究明」の姿に注目したい。

本作全編を通じて顕著なのは、ガブリエルの儂くも官能的な魅力。『エディット・ピアフ 愛の讃歌』では強く生き抜く意思力の女を見事に演じたマリオン・コティヤールが、本作

ではそれと正反対のなんとも儂げな役に挑戦！ガブリエルの性格や生き方には同感できないが、女優マリオン・コティヤールにとって本作は1方の代表作になるだろう。

2017（平成29）年10月25日記